毎日歌壇

伊藤　一彦　選

クラス替え終えし子の笑みそのわけは青木さんいて番号二番　大分市　赤峰　宏史

△評▽出席番号1番は目立つし、時には嫌な役も回ってくるか。青木さんのおかげでよかったが、青木さんはもう慣れているか。

五分間　必死であげた黒鯛を「おつかれさま」と海へと帰す　東大阪市　池中　健一

△評▽大きいクロダイだったようだ。おいしかっただろうに、そこは戦友の仲。

雑踏に紛れることもできなくて　普通って一体何ですか　四万十市　佐竹　紫円

本当のことだけ映す鏡でしょ　どうして私映っているの　川崎市　水　面

色褪せた三角コーンを突き破りてっぺん目指す雑草の青　長岡市　三月　とあ

あの人もこの人もまだ覚えてるわたしに痴漢した人の顔　相模原市　榎本　ハナ

突風に日傘傾くとき見えつ日なたの木槿白く撓える　東　京　井芹　純子

妻と子に話していないこと多しそれを減らすも終活のうち　いわき市　吉田　健一

百頁読みて既読と気づきけり何処に消えしか既読の記憶　吉野川市　喜島　成幸

インク薄め短歌で記しし父の戦記小さな手帳にかすかな文字が　安曇野市　保尊　重子

米川千嘉子　選

イスラエル産のピンクグレープフルーツが爆弾みたいに思える売り場　国立市　佐藤　建

△評▽ガザへの攻撃を止めないイスラエル。かんきつ類の生産が盛んな国でもある。おいしくて美しい果実ゆえに一層不気味だ。

祖母の文「また会ひませう」わがうちに七十年を旧カナ眠る　橿原市　神谷　和美

△評▽旧仮名が生き生きと生活に根付いていた時代のかすかな記憶。下句が巧み。

大チャンスにテレビカメラはターンしてベンチに入れぬ球児ら映す　浜松市　久野　茂樹

ひと刷毛で空を渡れるすぢ雲に手放せば楽になるよと言はる　鹿嶋市　大熊佳世子

みんなみんな「誰か」に相談したらって言うねどここにもいない「誰か」に　広島市　堀　眞希

死にざまを多く学んで生きてゐるたつたひとつの死へ向かふため　名古屋市　浅井　克宏

動かなくなってく妻の手をさする僕の心のリハビリとして　筑紫野市　桂　仁徳

今朝も夫の「行くぞ」にふりまわされておりついぞ聞かざりし「行ってきます」は　春日市　林田　久子

機嫌よく話す親父を泳がせる技を覚えて子は帰り来ぬ　東　京　富見井高志

「のぞみ号」は高層ビルのガラス面にすがたおりまげ空中を行く　城陽市　近藤　好廣

加藤　治郎　選

学校に通わなかった日々のこと誰にもわからない日々のこと　つくば市　萩原　夕貴

△評▽不登校の日々だろう。そのころの私のことは誰にもわからない。心にしみる歌である。短歌形式が回想をもたらした。

肥満気味ですと言われた獏を抱く　近頃ちょっと湿り気もある　大津市　世田　夏雪

△評▽私の悪夢を食べて肥満気味なのだ。少しあわれんでいる。湿り気が生々しい。

いつまでも手を振るひとを見つけたり観光船はわれに向かいて　川崎市　新井　将

我が父よ母よわたしを抱きしめて愛していると言ってください　川越市　松永　渚

ひたすらに失意の冴える酷暑でも頷くなんて返事をしない　平塚市　芝澤　樹

（また、遅い）（また、何もかも捨て去った）引っ越しのとき剝がした写真　福岡市　横井マリノ

二人とも黙ったままで列車待つ広島駅のホームの別れ　米　国　森本　弘

人の世に言えない「好き」が増えるたび誰が笑顔になるというのか　東　京　安　高良

別の誰かのもとへと走り出している朝のラジオ体操第一　横須賀市　森久保りりか

偽物の光が照らす偽物のカップラーメン　割り箸で食う　名古屋市　森本　有

水原　紫苑　選

真夜中に真実などがあろうかと囁く月さえ模写してしまう　東　京　境　千尋

△評▽月のささやきは真実かいつわりか、それさえもわからない真夜中である。模写された月はもはや月ではない。

絶望の淵にあなたは腰かけて煙草は六等星のあかるさ　高島市　くらたか湖春

△評▽6等星だが、まだ輝いている。それこそが本当の絶望かもしれない。

内臓がむき出しの木を撫でている　ひとりっきりになりたかったよ　岡山市　松井　度

死者の居ない棺のようにマドレーヌ型捨てられて星が冷たい　大野城市　野分　のわ

虹を焚くことで呼べます汎用型片翼天使のやや小さめを　枚方市　久保　哲也

理由なく称賛されるべきいのち　たまごの殻のやさしいうすさ　熊本市　夏風かをる

カルーセルポニーカルーセルポニー　羽を無くしたペガサスの標本　東　京　カ　ヒ

（パンの代わりにはなれません処分するならご自由に）詩集遠き目　甲府市　村田　一広

真っ白の紙面に沿って描く線　墨にまみれてぼくらはうたう　旭川市　蓮　実

とある世のほとりにてわが椅子は待つ劫罰こそが安らかならむ　雲南市　熱田　俊月

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます